

『夜の寝覚』の予言と構想：天人予言の達成

坂本，信道
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/11959>

出版情報：語文研究. 64, pp.17-27, 1987-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『夜の寢覚』の予言と構想

—— 天人予言の達成 ——

坂 本 信 道

る。本稿では、冒頭の二つの天人予言の達成と全篇構想との関連について考察し、『夜の寢覚』の作品像に迫っていくことにする。

二

周知のごとく、『夜の寢覚』は、女主人公中君の、姉の夫中納言との密通によって生じる様々な苦難が全篇の中心となつてゐる。委曲を尽くした執拗なまでの心情描写は、暗鬱なイメージばかりを漂わせ、現存本に拠る限り、作者の意図は一女性の悲劇を描くことにあつたように見える。実際、

人の世のさまざまなるを見聞きつものに、なほ寢覚の御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。(一—39)

という作品の方向を暗示するような起筆と、現存本の、

この世は、さばれや。かばかりにて、飽かぬこと多かる契りにて、やみもしぬべし。後の世をだに、いかでと思ふを、さすがにすがすがしく思ひ立つべくもあらぬ絆がちになりまさるこ

作品の全体像を把握するにあたっては、全篇の精緻な読みが不可欠だといえるが、伝存の状況によつては、それが著しく困難な作品も少なくない。そのような場合、推測を重ねることで欠損部分を補うわけであるが、必然的に作品像も揺れ動くことになる。中間と末尾にかなりの欠損がある『夜の寢覚』も、そうした状況におかれてゐる作品であつて、全体像について充分明らかになつてゐるとは言い難い。このうち中間部の欠巻は、『拾遺百番歌合』・『無名草子』・『風葉和歌集』、さらには中世の改作である『夜寢覚物語』等によつて、ほぼ全容が明らかになつてゐる。しかし、末尾の欠巻中のことは断片的にしからず、事件の順序さえ決定しかねる所も多い。したがつて、末尾の想定の仕事次第で作品像も異なつたものとなり、いまだに定説を見ないのが現状といえよう。現在までの研究を概観すれば、現存本末尾までに構想の一応の完結を見る説と、散逸末尾まですべてを含んで構想の一貫を主張する説とに分けられ

そ、心憂^{こころなや}けれど、夜の寢^ね覚^{ぼく}絶^たゆるよなくとぞ。(五—569)

という結びは、表現の上で女主人公の悲劇の物語の首尾として一貫すると言えなくもない。このような呼応は、これだけで一まとまりの感じを与えるし、また、ここまでの内容が暗い色調を帯びているのは確かである。だが、現存本の「暗」に対し、散逸末尾を「明」としてとらえ、異質なものととして峻別することはいかかであろうか。現存本末尾の詞章を物語全体をしめくくるものとし、現存本の完結を唱えた阪倉篤義氏は、

とにかくこの第四部(注——散逸末尾)は、第一部以下第三部にいたる部分(注——現存本末尾まで)とは一往別箇に、面白さ・楽しさを求める物語として新しく構想されたものであると見てよいものであろう。暗・明・暗の色調を主に書きつがれてきた第三部までの物語に、作者は、新しく明るい色調を鮮明に持った物語を、「読者のために」書き加えたのである。

と散逸末尾の明るさを説き、散逸の原因も統篇として成立・流布したためだと推定している。しかし、外部資料によって知られる散逸部の内容は決して明るいものではない。帝の求愛に対しての中君の困惑、中君の偽死、実子まさこの勅勤による隠棲、これらはすべて中君の苦悩の生涯の一齣であり、その意味で現存本と同じく、散逸末尾は「暗」と言えるであろう。

ところで、散逸末尾が「明」とされるのは、おそらく最終結末で中君一族に榮華が訪れるためと思われる。中君と男主人公中納言の間に生まれた石山姫の立后、中君養女尚侍腹の皇子の立坊などが、現存本の暗さと相容れないと言う訳である。こうした解釈の根拠として、従来は次に掲げる『無名草子』の記述が挙げられてきた。

また、后の宮・東宮など一度に立ち給ふ折、中のうへるざり出でて、

寢覚せし昔のことも忘れられて今日のまどるにゆく心かな
と言はれたるほど、いとにくし。(71頁)

これについて野口元大氏は、

あの夜な夜なからいくほどもなく、この晴やかな場に自分からのり出して、(中略)こんな歌を臆面もなく詠むヒロインを、われわれは、第三部終末のあの彼女と同一人格として詠みとることがはたしてできるであろうか。『無名草子』の「いとにくし」と評するゆえんであろう。

とし、中君の変貌ぶりが非難を受けているのだとする。そして、それをもとに、散逸末尾は読者の求めに応じたかたちで幸福な物語が綴られていたと推察、冒頭に言う「心づくし」な物語は、現存本末尾までで終結したと結論づける。また、永井和子氏は、前掲『無名草子』の評について、

これは物語の末尾欠巻部分にあたるためにはつきりしないが、不幸だった昔を忘れて、幸福な現在に満足していることを難じたものである。(中略)中君は、幸福になってはいけない人なのである。

と、同様の見解を示している。

これらの見解は、中君を不如意の人生に居るべき人物だとし、一族の榮達を喜ぶ姿が悲劇の女主人公としてふさわしくないため、『無名草子』の批判を受けたとする。だが、冒頭で「心づくしなるためし」と語られてはいるものの、物語が終結を目前に大団円に至ることは極めて自然なことである。『夜の寢覚』の結末が中君一族の

榮華に彩られていることは物語として自然であり、したがって、そこで歎喜のあまり歌を詠む中君の姿が描かれたとしても、そのこと自体は「にくし」と言われるほど異質のものではあるまい。むしろ、『無名草子』の非難は、中君の行為が、当時の讃嘆の基準、奥ゆかしさ、慎ましきからはずれているからと見るのが自然ではないだろうか。我が娘の立后、孫の立坊はこのうえない慶事であるが、それがめでたいだけ逆に、中君は慎ましく優雅に対処しなければならぬ。得意満面になっている中君の態度は、当時の行動の規範から逸脱したもので、物語の主人公、理想的女性としてふさわしくないものなのである。本来の中君は、もちろん慎ましくたしなみ深い女性として描かれている。

いとおほどかに、尽きせずあえかにはもてなしながら、さべき節々聞き過ぎず、憂きもあはれなるも、かならず聞きとどめ思ひ知るなめりかしと見えて、うらもなく心うつくしげにうちかすめたまふ有様の(五—38)

と、如才なく、かつどこまでも控えめな中君なのであった。これと比較すれば、先に掲げた『無名草子』に見られる中君が、女主人公としての理想性を欠いた尊大なるまいを非難されているのがわかるであろう。中君に榮華が訪れることが、物語のもつ悲劇としての構想に合わないからとか、悲劇のヒロインの境遇として似合わないからとかの理由による「にくし」ではないのである。

次の記述は、『無名草子』において、右のごとき観点から「にくし」という非難の辞が用いられていることを裏付けてくれる。

また、関白、我とも見まし仲の契りと宣ふ、大将の上るざり出でて、

武蔵野のゆゑのみならず枝深きこれも契りのあるところ見れ

と詠みたるも、いとにくし。(71頁)

右衛門督の上、殿の思ひ人にて、対の君などいふ名つきて、君だち後見してあるだに心づきなきに、うけばりて物怨じなどしたるこそ憎けれ。(72頁)

前者は子孫の繁栄を得意になって詠歌する態度、後者は夫没後、男主人公の愛人となり臆面もなくしゃばって嫉妬する態度を「にくし」と評している。慎しみを失ない、得々としている人物に非難がむけられているのである。

以上のように、『無名草子』の中君批判は、榮華のさなかで謳歌する姿が、中君の悲劇の女主人公としての造型に似つかわしくないからというのではない。換言すれば、現存本末尾までの「暗さ」を基調とする展開に対し、そうした中君の「明るさ」が適合し得てないという非難ではないのである。したがって、『無名草子』の評言もとに散逸末尾を「明」とし、現存本末尾までを「暗」としてその独立・完結を説くことは妥当でないと考えられる。

さて、鈴木紀子氏は以上のような観点からではなく、現存本末尾において物語が終結の気配を見せることを根拠に、現存本『夜の寢覚』の完結性を説く。氏の推定理由の一つは、帝の母大皇宮が、中君と中納言の仲を割こうとするのを諦めることである。中君を帝と無理やり対面させる機会を仕組んだり、中君の生霊出現の噂をまいたりして、中君を悩ませてきた大皇宮が、「つひにこの人のなかを逆へ果てず」なると、妨害を諦めてしまうことについて、

今後再び大皇宮の謀略に悩まされることはないと思わせる書きぶりである。更に司召によって主人公一族の昇進が華々しいのを見て交わされる朱雀院と大皇宮の会話には、もはや主人公達には太刀打できない諦めと悟りが見られ(後略)

と論じる。しかし、作中での大皇宮の役割を考えると、現存本末尾に至って諦念を述べ退場していくのは、むしろ当然ではなからうか。大皇宮は中間欠巻部で登場して以来、

・帝のもとに尚侍として出仕するよう中君に勧める。

・朱雀院に出仕するよう勧める。

・奸計をめぐらし、帝と中君を無理やり対面させる。

・中君の生霊出現の噂を言い散らす。

など、中君と中納言の仲を壊し、帝と中君を結びつけることによって、わが娘女一宮と中納言の仲を安泰に保つことを専らその役割としている。散逸末尾では、帝が中君に執拗に迫り、その結果中君の偽死、まさか勅勘などが起こるらしいが、こうした散逸末尾の主な構想が、すべて帝の中君思慕に端を発していることを考えると、思慕の契機を作ったことで大皇宮は役割を終えてしまったのではないか。大皇宮が直接難儀をもちだすことはなくなつたが、それを継承する形で帝が登場し、中君と中納言に干渉する。主人公達にとって困難な事態は散逸末尾に至っても相変らずであり、現存本末尾に於いて精算された訳ではないのである。大皇宮の諦念・退場をもって構想の終結を論断するには、いささか慎重を期すべきであろう。

鈴木氏は現存本末尾で中君が琵琶を弹奏することも、物語完結の理由の一つに数えている。

ここには深い意味があるようには見えない。ここで、彼女に日

頃慣れた箏の琴ではなく琵琶を弾かせることは、物語の冒頭に照応させるという意味で捉えれば、これも、終末を意識した作者の意向が窺えるのではなからうか。

しかし、琵琶は天人から「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という予言とともに習得した楽器である。中君が日頃は箏を弾じていたにもかかわらず、姉大君がいつも弾く琵琶の方を教えられたことは、単に『源氏物語』橘姫巻の模倣というだけではあるまい。琵琶は中君にとって「非日常」性を示すものであり、物語中で琵琶に手を触れることには、やはり何か重要な意味があるのではないか。このことについては、次節で詳述するつもりだが、簡潔に言えば、

『夜の寝覚』に於ける琵琶の非日常性とは、皇統とのかかわりである。現存本末尾の場面は、広沢入道邸で行なわれた私宴で帝とは無関係なようだが、後に中宮となる石山姫が、秘曲の伝承者として初めて登場する重要な場面なのだ。これまで素姓の卑しさが唯一の瑕とされてきた石山姫であるが、中君の娘であることが公表され、将来の榮華は確固たるものとなる。都での輝かしい将来へむかって広沢を離れる石山姫。その門出に際して催された宴で、中君が琵琶を弾じ、石山姫が母中君に劣らぬ名手として紹介される。中君一門にとつては「国王」とかかわる人物の披露であり、物語の終結と言うよりはむしろ、以後の展開への出発点となっていると言えよう。

以上は現存本末尾までに完結を看取する諸説に対し私見を加えたものである。もちろん、現在残っている部分に限って文学性を論ずることは可能であるとしても、構想に関して言えば、現存本のうちに完結を見出だすのは、やはり無理があるように思われる。

散逸末尾までを含めた作品像をどうとらえていくかが当面の課題であるが、従来も作品の全体像をめぐっての論者はなされてきた。

永井和子氏は、現存本について、「外部よりも個人の心を忠実に記録する」というリアルな方向へ」と「心理的な方向へ深められ」た結果、作者と作品の距離が失なわれ、日記的な世界に近づくとする。そして、その延長上に散逸末尾を、より心理的に深化されたものとして予想している。また、鈴木一雄氏は、散逸末尾に、母親となった女性の心理を描くことに発展の余地を認め、『蜻蛉日記』下巻と似た主題を想定する。従来は、心理描写の発展・深化を散逸末尾に期待し、心理描写の等質性から現存本と散逸末尾の連続が考えられてきたのである。

『夜の寝覚』全体の構想・主題を考えるにあたっては、右のごとき心理面からの考察以外に、冒頭に置かれている天人予言の達成という面からの考察も不可避のことであろう。

天人予言は、八月十五夜、中君の夢の中で行なわれる。第一の予言は、

今宵の御筆の琴の音、雲の上まであはれにひびき聞えつるを、
訪ねまうで来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の
下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の
契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつり
たまふばかり(一—41)

というものである。この予言と構想については、

女主人公の悲劇こそ物語の主流なのである。これに対して、「これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」の予言のほうは、これまでのところ実現化が希薄である。
(中略)物語発端の奇跡や予言の跡はやはり退化していることになる。(5)

といった見解が主流であり、第一の予言は物語の展開とともに構想から欠落していったとするのが、なかば定説となっている。

だが、ここで「国王まで伝へ」という意味をよく吟味してみなければならぬ。はたして天人から秘曲を授かった中君が、帝にそれを伝授するという意味でよいのだろうか。

天人が秘曲を教授する話は、既に指摘されているように、『宇津保物語』俊蔭巻・『源氏物語』宿木巻などに見えるが、さらに溯れば『今昔物語集』・『古事談』・『十訓抄』等に収録された説話の原型にたどりつくのであろう。有名なものは廉承武の霊が村上天皇に秘曲を授けた話であるが、説話に共通するのは、あくまで「天人による秘曲伝授」の神秘性が眼目になっており、摩訶不思議な事件を記述することを目的としていることである。つまり、天人が音楽の名手の前に現れ、秘曲を伝授することで話は完結する。

ところが、物語の秘曲伝授の場合はそれだけにとどまらない。『夜の寝覚』と同じく、秘曲伝授と天人予言をもつ物語に『宇津保物語』があるが、

天の掟ありて、天の下に琴弾きて族たつべき人になむありける
(俊蔭 14頁)

という、天女が俊蔭に与えた予言には俊蔭一族の栄達が示されている。実際、秘曲は俊蔭から俊蔭女、仲忠、大宮と伝承され、同時に

一族の繁栄が進行していく。だが、俊蔭の伝授した秘曲が帝に直接伝えられることはなかった。むしろ、東宮の琴の師となって秘曲を残らず伝授するべく帝から命じられた時、俊蔭は、「無礼の罪には当たるとも、このことはまねび仕うまつらじ」と奏上して官界を去っている。以後、俊蔭は不遇のうちに世を去り、予言のごとく一族の栄達を見るのは、はるかに物語末の楼上下巻を待たねばならない。

一族の栄誉が回復するのは、俊蔭から伝えられた秘曲を犬宮が披露する場面であり、しかもその折に、嵯峨・朱雀兩院の御幸が行なわれていることは、天人の秘曲を伝承することが、一族の皇統接近をもたらし、栄華を手中に収めるための重要な「仕掛け」として機能しているのを示していると言えよう。ここでは天人から秘曲が伝授されることよりも、代々の伝授による栄達が中心になっているのであって、物語と説話における秘曲伝授の意味の相違はこの点にあるのである。

『夜の寢覚』の天人予言と秘曲の伝承も、栄華に至る「仕掛け」として解釈できないだろうか。帝への伝授そのものが目的でなく、帝へ伝授するような栄華が一族に訪れることに重点があると見るのである。

秘曲を「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という予言を与えられた中君自身は、准后にはなったが入内・立后することはなく、臣下の身分を出ることはなかった。しかし、それで第一の予言が霧消した訳ではない。中君には養女を含め五人の子があるが、その中で音楽の才能が描かれているのは石山姫だけである。石山姫は母中君や祖父入道から教えを受け、その結果、石山姫の楽才は、ただ今の折にあはせて弾きたまへる、すべて十余の人の琴の音

とも聞えず、上手めきおもしろきこと限りなし。(中略) これは、いとおもしろく美々しく、そぞろさむく上手めかききこと、今からすぐれたまへるに。(五一—五五)

と、秘曲伝承者たるべき資質をもつ者として、他の子たちとは明らかに区別して描かれている。中君の秘曲伝承者としての楽才は、石山姫に引き継がれたのであって、「国王まで伝へ」という予言は、石山姫へと引き継がれているのではないか。石山姫については、

ただうち見るより際もなき人の生先、その道ならぬ大和相をおほせて、うなき位を極めたまはむこと、なにの疑ひあべうもあらぬ人のものしたまひける。(五一—四六)

と将来后位につくことが暗示され、事実、『無名草子』や『風葉和歌集』に拠れば、東宮妃として入内し、やがて中宮となったことが知られる。天人の秘曲伝承者が后位につく、ここに「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」とあった第一の予言の実現を見てよいのではないだろうか。

『宇津保物語』では音楽の伝承が一族に栄華をもたらす仕掛けであり、『源氏物語』でも音楽伝承が明石一族の栄達に大きく関与している。特に後者は、伝承者である明石姫が中宮となる構図が、『夜の寢覚』と同一であって、これらは音楽伝承譚としての性格を備えている。音楽は一族の栄達・皇統接近と深く関わっているのである。

そう言えば、『夜の寢覚』に於いて、天人から習得した琵琶が弾かれるのは極めて限られており、わずかに二箇所過ぎないが、いずれも帝・皇統と関係があるように思われる。一箇所は中間欠巻部内のことで、改作本によると、嵯峨野の花見に出かけた宮中將が偶然中君の弾く琵琶を聞く。すっかり魅了された宮中將は、後日「天の

樂にやと耳とどまりて」と帝に伝奏するが、これが以後の帝の中君恋慕へ繋がっていく。『夜の寢覚』後半の帝と中君の物語の発端は、天人の伝えた琵琶なのである。中君が琵琶を弾くのはもう一箇所、現存本末尾にある。広沢からの帰京を前に、入道・石山姫・まさこの居る場で中君は琵琶を弾く。全くの私宴であり帝・皇統とは無縁のようだが、この場に後に中宮となる石山姫が臨席して琵琶を聴くことは、「国王まで」伝えることと全く関係がないとは言えない。この折の中君の琵琶は「おんじやうがく」と形容されているが、この語は天人の秘曲を意味するものである。一方、石山姫はこの場面での楽才が述べられており、秘曲伝承者として秘伝の琴を祖父入道から贈られる。伝承者の資質を備える石山姫が、母の伝える天人の秘曲を聞く場面であり、秘曲伝授の一齣と見てさしつかえあるまい。以後石山姫の入内・立后により、天人の秘曲は「国王」に限りなく接近していくのである。

このようにみてくると、『夜の寢覚』の秘曲を「国王まで伝へたてまつる」という第一の予言は、中君自らが帝に伝授するのではなく、中君の子孫が秘曲伝承の果てに皇統に接近することだと解釈できると思われる。具体的には、秘曲伝承者である石山姫の立后によって国王への伝授はなされたと言ってよいのである。天人の予言と秘曲は、中君一族の栄達を推進していくための「仕掛け」なのであって、物語の終末に一族の繁栄が訪れるまで機能しつづけている。つまり、第一の予言は物語の終末まで構想の中心として効力を失なっていないと言つことになる。

第二の天人予言は、第一の予言の翌年、約束どおり天人が現れて秘曲を伝授し、

あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな（一—44）と告げる。これは巻四にある、

つくづくとおぼしつづくる夜な夜な、「さるは、面なれて、さすがに度ごとに、いみじう心の乱るこそは、かの十五夜の夢に、天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」とおぼしいづるぞ

（四—43）

という中君の回想によって受けられており、第二の予言は構想として存続していることが知られる。実際、中納言との意外な契り、帝の執拗な求愛、意の進まぬ老閑白との結婚など、中君の不如意の生涯は全篇にわたっているため、従来も中君の不幸を述べた第二の予言は、作品の構想を示すものとして重視されてきた。『夜の寢覚』は第二の予言にあるごとく、不幸に沈む中君の姿・心理を描くことが主題だと言つのである。

しかしながら、悲運の女主人公の心理を婉々と綴っていくことが、物語の目的・主題となることが可能であったのだろうか。たしかに『夜の寢覚』は中君の不幸が基調になっているが、主人公が不幸のままに終始する物語がかつて存在したか。それが『夜の寢覚』の新奇さだと言えはそれまでだが、当時の物語の中にあつて『夜の寢覚』だけが、主人公の心理描写という点で飛躍的に新しさを獲得できたとするのは、いかにも不自然であろう。主人公が辛酸を嘗めつくしたあと、幸福に至るか、あるいは幸福の実現を確実にした時点で終結するのが、物語本来の姿である。幸福は最後の到達点であり、物語のほとんどはそこに至るまでの不如意な状況を描くことに充てられる。とすれば、『夜の寢覚』に語られる中君の不幸も、主人

公としてみればことさらに珍しいものではないことになる。一組の男女の物語で、それがいかに「心づくし」なものであるかを述べる冒頭を持ち、それに従った苦難を描き、かつ終末に一族の栄達を見るこの物語は、物語本来の性質をそっくり備えているのである。

中君が不幸な生涯を送るであろうという第一の予言は、なるほど物語の構想となつてはいるが、それが『夜の寢覚』のすべてではない。これまでは構想から欠落したとして軽視されてきた、秘曲を国王まで伝えるという第一の予言も、構想上の重要さから言えば、第二の予言に劣らないのである。中君の不幸な生涯を描いてその心理を克明に記すことが主題であるとするのは、あまりに近代的な感覚による解釈ではなからうか。

四

中君の不幸を描いた作品だという立場を一旦棄捨すると、主人公が幸福を手にするような要素を、『夜の寢覚』もまた含んでいることが見えてくる。

まず第一に挙ぐべきは、登場人物達の最終官位であろう。人名を物語の最終官位で示す『風葉和歌集』に拠ると、中君は准后、中納言は関白、石山姫は中宮などとなっている。老関白の次女で、尚侍となつていた中君の養女は皇子を産んでいたが、『無名草子』に拠るとその皇子は東宮となつたことが知られる。中君と中納言は中宮の父母、東宮の祖父母として、ゆるぎない地位を獲得しているが、こうした栄達は散逸末尾に入って突然始まるのではない。既に現存本末尾の司召でも、「ただこの御ゆかりの一筋の、世の道理も消ちて喜

び栄えたるさま」(五—54)と、一門の高官独占が語られている。勢力たるや並ぶものなく、朱雀院でさえ、

帝すら大臣のままにおはす。代も去りにたり。逆へ言ふべきか
たなきことなり。(五—55)

と諦める次第であつた。少なくとも世間的境遇からは、中君が不如意のまま済んでしまうことにはなっていないのである。

右のような事実について、官位という表面的な所では幸福であっても、中君の心情はなお不幸だつたとする反論もあるだろう。そこで第二に、中君と中納言とが睦み合う姿が描かれるようになってくることを挙げておこう。二人の逢瀬がなごやかな調子を帯びてくるのは、中君が無理やり帝と対面させられ、やつとのことで窮地を脱して以降である。

十年ぶりの逢瀬では、

めづらしくあはれに、夢の心地こしちするにも、忍びがたう涙のこぼれつつ、秋の夜だに人がらなるものなれば、まいて、春の夜の短さは、まどろむほどなく明けぬるなめり。(三—31)

と歓喜する中納言だが、これが中納言だけの一方的な喜びでないことは、中君が帝の一件を告白し、中納言を「心浅うもはべらざりつるものを」と頼りにしていることから知られる。逢瀬の尽きぬ喜びが、「春の夜の短さ」なのであろう。

中君が中納言の屋敷へ移り住んで、世間的にも二人の仲が認められて以後は、さらにこうした場面が増してくる。今までの中君のつれなさを責める中納言に対し、中君は、

「など、かく我が御方あたさまにのみは、誰がつかかりける乱れにかは」と言ひ出でたまへるを、「いかに、いかに」と、せめて問

はれて、「いなや、旅寝の夢を思ひあはするまではひとりあらむとおぼさざりける浅さに、さまざまなりける乱れとこそおぼゆれ」とうち笑みて、うらもなく言ひ出でたまひたるなつかしさに、我も笑まれて（五―526）

と恨み返す。九条で相手の素姓も知らぬままに契りを結んだ後、それを明らめもせず他女と結婚した中納言を責めているが、この部分に関して鈴木一雄氏は「寢覚の上は初めて女として恨む」と指摘するが、まさにそのとおりであろう。

もう二例だけ挙げる。女一宮の所へ心ならずも出かけてゆく中納言にむかって、中君は「泣くにしとまるものならば」（五―527）と詠みかけるが、これも以前にはなかった女としての中君の心情をあらわしている。また、帝の手紙を詰問する中納言に、「あめりしかど、いさ、見ずなりにけり」ととりあわぬ風ながら、まだ結ばれたままの、目を通してない帝の手紙を渡して見せる（五―527）。こうした中君の行為は、恋愛関係にある男女のあいだの、ごく普通の情景とみてさしつかえないと思われる。

冗長になるのですが、この場面は列記しないが、今例示したような中君の姿に、中納言との仲を見切り、人生を諦めてしまった姿は見えて来ない。特に巻五に入ってから、中君と中納言が男女としてうちとけたやりとりをすることが多くなるのであって、二人の仲はそれ以前より円滑にいつている。『夜の寢覚』は少しずつ終末の大団円に向かっているのではなからうか。

最後に、物語が幸福な結末へと進みつづあることを作中和歌の面から検討してみよう。

物語の作中和歌については、唱和歌・贈答歌・独詠歌という分類が一般に行なわれているが、⁽²¹⁾『夜の寢覚』の和歌をこれに従って分類すると、現存本中に見える全七十五首のうち、

中君の独詠歌

八首

中納言の独詠歌

六首

中納言の贈歌（中君の答歌なし）

六首

中君と中納言の贈答歌

十四首

の計三十四首が中君と中納言に関係している。右の数値を見て意外なのは、中君の独詠歌の少なさである。独詠歌の表現性については、物語では特に作中人物の他者と分かちがたい憂悶や感懐を表現する方法として効果的であるが、初期物語にくらべ、源氏物語を境として急増し、主人公ないしはそれに準ずる人物が、周囲への疎外感や憂悶を抱く内面的人間として造型されていることと見合う。⁽²²⁾

といったものが一般に言われている。とすれば、女性の不幸な生涯を通じ、その内面までを描写している作品と従来言われてきた『夜の寢覚』の主人公中君は、まさに独詠歌を詠むにふさわしい人物のはずである。宇治十帖の心理世界を継承し、次第に現世への諦念に支配されていく中君だとすれば、巻次の進むにつれて独詠歌は増加するのが当然だろう。ところが、実際の独詠歌の分布は、⁽²³⁾

巻一 ① (44)

巻二 ②⑤ (221) ・ ②⑧ (229) ・ ③⑩ (231)

巻四 ⑤⑨ (414) ・ ⑤⑪ (426) ・ ⑥① (436)

巻五 (57)

であり、心理描写が増加し、中君の諦念が深化すると言われる巻三以降でも増加せず、巻五に至っては一首しかない。これに対し、中君と中納言の贈答歌は、

巻二 (26-27) (228-229)

巻三 (34-35) (258)

巻四 (33-34) (382)

巻五 (64-65) (509) ・ (66-67) (511-512) ・ (68-69) (527) ・ (74-75) (565)

と巻三以降に六組あり、特に巻五への集中が甚しい。独詠歌の漸減と贈答歌の急増は、物語が次第に幸福な要素をもちはじめていることを現しているのではないか。中君と中納言の関係は、円満な方向へと移行していると言えよう。

浮舟は『源氏物語』全七百九十五首のうち二十六首を詠んでいるが、独詠歌は十一首に及び、その九首までが手習巻にある。鬱屈たる浮舟の想いは一連の独詠歌に託されており、「手習君」なる呼称が彼女の境涯を端的に示している。また、『狭衣物語』全二百十四首のうち、独詠歌は百十首、狭衣大将の独詠歌は七十五首を占める。最後まで飽くことなき想いを抱いて彷徨する彼もまた、晴れやらぬ心情を独詠歌のうちに吐露しつづける。

浮舟や狭衣大将と比較すると、『夜の寝覚』の中君は独詠歌の詠者としては随分違っている。和歌の面から見れば、中納言との贈答歌を多くもつ中君は、現世を諦め、一人悶々と憂いに沈んでいるとは言えないであろう。不幸な境涯の中にありながらも、中君は決して閉塞した状況の中にあるのではない。娘の立后、孫の立太子という幸福な結末を遙かに望みながら、中君と中納言の仲は好転しつつあ

るのであった。

六

『夜の寝覚』は、女性の不如意な生涯を語る主題小説として、また、現世の不幸の中で自身の心を見つめる女性の内面を描く心理小説として解釈され、評価されてきた。それは起筆部分にある「心づくしなる」契り、現存本末尾の「夜の寝覚絶ゆるよなくとぞ」、あるいは「いたくものを思ひ、心をみだしたまふべき宿世」という第二の予言などの辞句に負うところが多かった。

しかし、従来構想とは無関係であるとされていた「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という第一の予言は、子孫への音楽伝承の結果、秘曲伝承者たる石山姫の立后により実現しているのである。第一の予言が物語終結まで構想として存続していたということは、必然的に、『夜の寝覚』が一門の栄達を予示する第一の予言のもつ幸福な性格を失なっていないことを意味している。こうした性格はこれまでほとんど顧みられることがなかったが、物語を丹念にたどれば容易に窺うことができる。巻三・四・五における中君と中納言の男女として睦みあう場面の数々、あるいは中君の独詠歌が減少し、中君と中納言の贈答歌が増加してくることなどは、物語が幸福な結末へ向かいつつあることを裏付けていると思われる。『夜の寝覚』には、悲運に沈む中君の姿ばかりでなく、中君一族が幸福な栄華へ向かうさまも併せて描かれている。物語の典型である、苦難を克服した主人公が幸福になるという型を、『夜の寝覚』は備えていて、それは既に、冒頭に置かれた、「国王まで伝へたてまつりたまふ

ばかり」という第一の予言で示されていたのである。

〔注〕

- (1) 『夜の寝覚』の本文は、小学館日本古典文学全集『夜の寝覚』に拠り、巻数と頁を括弧内に示す。以下同じ。
- (2) 阪倉篤義氏 日本古典文学大系『夜の寝覚』解説。
- (3) 『無名草子』の本文は、新潮日本古典集成『無名草子』に拠る。
- (4) 野口元大氏 「夜のねぎめの主題と構造」(上)、『文学』昭42・4
- (5) 永井和子氏 「寝覚物語の「中君」(『源氏物語』を中心とした論考)』昭52 笠間書院 阪倉氏(2)は、「第三部に描かれた寝覚上とは、まるで別人の感を与えるもの」とする。
- (6) 『枕草子』を例にとれば、「物語するに、さし出でて我ひとりさいまくる者。すべてさしいでは、わらはもおとなもいとくし」(山岩波書店 日本古典文学大系『枕草子』二十八段)や、村上大皇御前での宣耀殿女御の奥ゆかしさ(同二十三段)などがあげられる。
- (7) 『無名草子』の作者の好尚について、桑原博史氏は、「喜怒哀楽の情のあらわな表現を(喜びや楽しさであっても)避けて、平静中庸であることを美徳と考えている。」とする。(前掲(3) 書解説)
- (8) 鈴木紀子氏 「夜の寝覚」現存本の完結性」(『平安文学研究』第五十三輯 昭50・6)
- (9) 大皇宮と同様の役割を与えられているのが女一宮で、大皇宮が女一宮と中納言の仲を堅固にしようとする原因となるだけであり、帝の中君思慕が物語の中心になると、表舞台から退いてしまふ。
- (10) 野口元大氏 前掲(4)に同じ。
- (11) 永井和子氏 「ねぎめの構造」(『平安文学研究』昭35・11)
- (12) 鈴木一雄氏 前掲(1) 書解説。
- (13) 鈴木一雄氏 前掲(1) 書61頁頭注。
- (14) 鈴木弘道氏 『寝覚物語の基礎的研究』(昭40 塙書房)

(15) 『宇津保物語』の本文は、『宇津保物語 本文と索引』(昭48 笠間書院)に拠る。

(16) このことについては、別稿を用意している。「音楽伝承譚の系譜——『源氏物語』明石一族から『夜の寝覚』へ」(未発表)

(17) 前掲(16) 参照。

(18) 尾田敬子氏は、「中君の血縁につながる音楽にすぐれた一族の今後の繁栄を感じさせる場面となっている。」とする。「散逸『果守』についての一試論」(『国語国文』昭59・11)

(19) 鈴木一雄氏 前掲(1) 書61頁。

(20) こうしてみると、現存本末の「この世は、さはれや……」という記述の方がむしろ唐突にさえ感じられる。中君の出家意向も、「心の中にすこしは思ふことなれど、あぢきなく世を厭ふ心もなかりき。心地の苦しかりしかば、ながらへもやするとてこそ思ひたまへ寄りしか」(五—52)と述べられていた。

(21) 森岡常夫氏 『源氏物語の研究』(昭23 弘文堂) 鈴木一雄氏 『源氏物語』の文章」(『解釈と鑑賞』昭44・6)

(22) 『和歌大辞典』(昭61 明治書院)。他に、森岡常夫氏「ほとんど知的技巧を伴はぬ真情の吐露である。更にその多くは主要人物によって詠まれている」(前掲(21)に同じ)、後藤祥子氏「独詠ははっきりと、不幸者の物である」(『独詠歌論——詠嘆の変貌』「国文目録」七 昭43・5)、森下純昭氏「独詠歌の系譜——状況との関係」(『熊本大学国語国文学研究』五 昭44・12)など。

(23) 『夜の寝覚』の和歌に通し番号をふって○印内に示す。括弧内は頁数。

(24) 贈答歌の増加は物語の幸福化と直接には結びつかないかもしれないが、明るい色調をもつものもあるので掲出した。

(25) 数値は小学館日本古典文学全集『源氏物語』六の「源氏物語作中和歌一覧」に拠った。

(26) 数値は岩波書店日本古典文学大系『源氏物語』に拠って算出した。